

三十二大人相の系統(I)

岡 田 行 弘

古代インドでは偉大な人間は一般の人に見られない特別な身体的特徴を具備していると考えられていた。仏教内においても仏・如来あるいは転輪聖王などの身体には三十二の相があるという信仰が形成された。この三十二大人相(*malapuruṣaśaṣṭina*)は八十種の副次的な特徴(種好、随相 *anuvyājana*)と並んで、様々な経論中にその記述が登場する。またこれは仏像様式との関係の点からも重要である。しかし個々の相の名称が経論の相互で細かく相異しているということはしばらく措くとしても、一、三十二相の選択(何をもって三十二相とするか)、二、各相を配列する順序、三、各相についての説明(その特質や獲得の方法等)の三点に関しては、各経典は著しい相違を示している。後述の如く『大智度論』では同一文献中に系統の異なる記述が存在し、またサンスクリット原典とその漢訳とが大きく相異なる場合も多い。著者は既に真諦(*Para-martha*)の訳経論中に見られる三十二相の記述についてその特徴を簡単に報告した(『真諦訳経論中の三十二大人相』『宗教研

究』二七一号一九八七年一九六頁以下)。今回は漢訳仏典を中心に蒐集した資料を前記の三点、特に選択と配列に従って分類整理し、その過程から浮かび上がってくる三十二大人相の系統について要点のみを示すこととする。なお資料の中には三十二相のうちのいくつかの相が欠けていたり、八十種好が複数混入しているものもあるので、それらについては後日にゆずる。また個々の系統を比較するために対照表を掲げることが紙数上不可能なので、各系統において必要な細部にわたる比較検討は次の機会を待ちたい。

I パーリ仏典の系統

パーリ仏典中では次の三箇所^aに記述がある。^a *Mahāpadānāsuttanta* (DN Nr.14; Vol. II pp. 17-19). 『長阿含経』(1)大本経』後秦仏陀耶舍共竺仏典訳(大正一、五上一下)。^b *Lakkhaṇasuttanta* (DN Nr.30; Vol. III, pp. 143-144). 『中阿含経』(五九)三十二相経』東晋僧伽提婆訳(大正一、四九三下

三十二大人相の系統(Ⅰ) (岡田)

一四九四上)。^c *Brahmayasutta* (MN Nr 91; Vol. II, pp. 136-137). 『中阿含經(一六一)梵摩經』東晉僧伽提婆訳(大正一、六八六上一下)、『梵摩經』吳支謙訳(大正一、八八三下—八八四上)。以上 a、b、c のバーリ原典において三十二相の選択と配列は完全に一致する。これを F. Edgerton は『仏教梵語辭典』の *lakṣaṇa* の項で用い、オリジナルなものと見なしうると述べている。しかし対応する漢訳を見るとそれぞれバーリ原典と大きく相違している。むしろ漢訳の方が、整理會通されて同一配列となっているバーリ原典の祖型を示唆しているのではないかという可能性も否定できないし、經典を傳承した部派の相違も考慮する必要がある。なお『三十二相經』と『梵摩經』は同一の漢訳者であるため配列順序は完全に一致している。また四種の漢訳のうちバーリ原典に最も近い配列は支謙訳の『梵摩經』である。

II *Lalitavistara* (a) の系統

三十二相は通常、手足に見られるものから始めて頭部へと配列されているが、この系統は頭部→手足の順で各相を配する。また他の系統(Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ)では三十二相に含まれていない *śaṃvīpūṭa* (額廣平正)・*abhinīlapradakṣiṇāvaṛakeśa* (螺髮右旋其色青紺)・*śuivartitōru* (髀膊長)が登場する。なお a と記したのは *Lalitavistara* の別の箇所 b と区

別するためで、ここでは手足→頭部という配列である (Cefmann ed. pp. 429-432)、『方廣大莊嚴經』(大正三、六〇九中—六一〇上)。この系統に属するものとして次の經典を挙げることができる。 *Lalitavistara* (a) (pp. 105-106)、『方廣大莊嚴經』唐地婆訶羅訳(大正三、五五七上中)、『普曜經』西晉竺護訳(大正三、四九六上)、『太子瑞應本起經』吳支謙訳(大正三、四七四上)、『大乘百福莊嚴相經』唐地婆訶羅再訳(大正十六、三三二中下)、この異訳である『妙吉祥菩薩所問大乘法螺經』宋法賢訳(大正十四、五一七下—五一八上)。有名な *Mahāvīṇīputti* (236-267) もこの系統に属する。また『優婆夷淨行法門經』失訳(大正十四、九五四下—九五五上)もこの系統であるが説明部分(九五五上—九六〇上)では、手足→頭部という配列である。

III 『大智度論』(a・b・c) の系統

大体の配列はⅠに似ているが、Ⅰで齒に関する相は四種(四十齒、齒齋、齒密、齒白)であるのに対し、これらを三種に数える。一方Ⅰに無い *vyāmaprabha* (丈光相・常光一尋相)を加えて三十二相とする。若干の説明を加えながらこの系統に属するものを挙げる。『大智度論』第四(a)後秦鳩摩羅什訳(大正二五、九〇上—九一上)、同第二九(b)(大正二五、二七三下—二七四上)。この二者の配列は若干の相違があるが

明らかに同系統である。また『摩訶般若波羅蜜經』後秦鳩摩羅什訳（大正八、三九五中下）とその引用である『大智度論』第八八（c）（大正二五、六八一上）とは全同であり、『大智度論』（a）との相違は三カ所で配列順序が入れかわっているのみである。『摩訶般若』に完全に一致するものに『過去現在因果經』劉宋求那跋陀羅訳（大正四、六二七中下）があり、また『坐禪三昧經』姚秦鳩摩羅什訳（大正十五、二七六上中）及び『大乘百福相經』地婆訶羅訳（大正十六、三三〇中）も『摩訶般若』とほぼ同じである。サンスクリット原典の存する *Bodhisattvabhūmi* (Wogihara ed. pp. 375-376) もこの系統であるが『大智度論』（a）における第十五相の丈光相が第十二相に配当されているのをはじめとして配列上の二、三の相違がある。三種の漢訳のうち原典とよく一致しているのは、玄奘訳の『瑜伽師地論』（大正三〇、五六六―五六七上）であり、他の二種即ち『菩薩地持經』北涼曇無讖訳（大正三〇、九五五上）及び『菩薩善戒經』劉宋求那跋摩訳（一〇〇九中下）とは若干の相違がある。なおこの二種の古い漢訳は、語句のレベルまで非常に相似している。また『菩薩善戒經』に完全に一致するものに失訳の『大方便仏報恩經』（大正三、一六四下以下）がある。さらに注目すべきものに *Abhiharmaḍḍa* (Jaini ed. pp. 188-189) 及び *Saṅghabhedavastu* (Gnoli ed. I. pp. 50-51) の配列は『大智度論』（a）と同一である。しかし漢訳の

『根本説一切有部毘奈耶破僧事』（大正二四、一〇八下―一〇九上）は、配列が原典とは相違している。この義浄の訳は『瑜伽師地論』に語句のレベルまでよく一致しており、彼が玄奘の訳を利用したことを示している。なお漢訳のアビダルマ関連の論書で三十二相の記述がある唯一のものと言える『大毘婆沙論』玄奘訳（大正一七、八八八上―八八九上）も『大智度論』（a）の配列にほぼ等しい。ただし第二十八相（梵音は『大毘婆沙論』では最後に配当されている）。

IV ナーガルジュナ論書の系統

この系統はⅢにあった丈光相を欠き、齒に関する相は四種を数える。従って相の選択に関してはⅠの系統と同一である。しかし配列は手足↓頭部という普通の型を踏襲しながら、顕著な特徴を持っている。例えば通常第三十一・三十二相に配当される頂髻相 (*Uṣṇīṣa*) と眉間白毫相 (*Bhruvā*) が順に第二十三相と第十七相に出てくることである。この系統でナーガルジュナの著作は『十住毘婆沙論』後秦鳩摩羅什訳（大正二六、三六上、六五上―下、六九上）*Ratnavali* (Hahn ed. 2. 269c) およびその真諦訳『寶行王行論』（大正三三、四九七中―下）である。興味深いことに『大智度論』第十一（d）（大正二五、一四一中―下）はナーガルジュナ論書の系統に属する。他の三箇所（系統Ⅲの a・b・c）と系統が異なっている。

ことは、『大智度論』の成立を考える上で示唆に富んでいると言えよう。また竜樹本自在比丘釈とされ、『十住毘婆沙論』や *Ratnavali* との相似点の多い『菩提資糧論』隋達磨笈多訳(大正三二・五三五下—五三六中)も二・三の相を欠いているもののこの系統にはいる。さらに *Maitreyanātha* の著作とされる *Abhisamayalakankara* (III. 13-19) はナーガールジュナ論書と完全に同一の選択・配列であって、作者がこの系統の三十二相解釈を忠実に継承していることを示している。また天親菩薩造の『寶髻經四法憂波提舍』元魏毘目智仙訳(大正二六・二七六中—下)もこの系統である。仏教術語集とも言うべき *Dharmasamgraha* LXXXIII (Kasawara ed. pp. 18-19) もこの系統であるが、宋の施護による漢訳『法集名數經』(大正十七・六六一中)における三十二相の記述は次のVの系統に属する。

V 『大般若』の系統

ここではIからIVの系統には登場しなかった「満月のような顔面」(面輪其猶滿月, *pūrṇacandranibhāna*) が三十二相の一つに数えられている。またIIIの系統の丈光相が第二十二相として出てくる。一方齒に関する相は二相にまとめられている。この系統の代表は玄奘訳の『大般若波羅蜜多經』であり初会、第二会、第三会、第六会の四箇所に見える(順に大正

六・九六七中—九六八上、大正七・三七六中—下、同七二六上—中、同九六〇上—下)。初会・第二会と第三・六会とは、第四相と第五相の順序が入れ替わっているが、語句まで完全に一致しており、玄奘の訳場が整備されていたことを示している。*Dassaharika* (Sten Konow ed. pp. 108-109) も『大般若』の系統である。この系統に属するものには、宋時代の漢訳仏典が多く見られる。即ち寂友造施護訳の『仏吉祥徳讃』(大正三二・七六四中)、*Dharmasamgraha* の漢訳で同じく施護訳の『法集名數經』(大正十七・六六一中)、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』の第一巻から第九巻までと同内容の『衆許摩訶帝經』法賢訳(大正三・九四〇中—下)はこの系統である。また *Arthavinicaya* (系統VIに属する) の漢訳とされる『法乘義決定經』金總持等訳(大正十七・六五八中—下および六五九上—六六〇上)も『大般若』の系統である。これらの漢訳は相の選択・配列のみならず、訳語の細部に至るまで玄奘訳を使用している。なお『仏吉祥徳讃』で面如満月相を欠き、『衆許摩訶帝經』で足下有平満相を欠いているのは、訳者の不注意に帰因するように見受けられる。

VI *Gaṇḍavyūha* の系統

この系統は *Gaṇḍavyūha* (Vaidya ed. pp. 309-310), *Ratnavagotravibhāga* III. v. 17-25 (Johnston ed. pp. 94-96) が代表

的なものである。これらは三十二以上の数の相を三十二相として挙げ、*kambugriva* (頸如紺蒲)・*nārāyaṇaśhama-dhātama* (威德勢堅固猶如那羅延) のような他の系統では三十二相に含めないものが登場してくる。漢訳は『大方廣仏華嚴經』(八十卷)『唐實又難陀訳』(大正十、四〇八上)、『大方廣仏華嚴經』唐般若訳(大正十、七八八下)および『究竟一乘寶性論』後魏勒那摩提訳(大正三一、八一七下、八四四—下)であるが、サンスクリット原典とは配列等の点でかなり相違している。*Rathagotravibhaga* は三十二相の記述を『寶女經』(*Ratnadharmikaśāstra*) に依つてゐることを明記してゐる。確かに現存する二種の漢訳の『寶女所問經』西晉竺法護訳(大正十三、四六八下—四六九中)と『大方等大集經』(三)寶女品』北涼曇無讖訳における配列は『寶性論』に極めて似ており、この系統に属することは疑いない。ただし上記の *kambugriva* に対応する語は欠けている。ともあれこの系統は種々な問題を含んでいるので『無上依經』梁真諦訳(大正十六、四七三下—四七四中)なども合わせて、後日詳細に論じたい。なお仏教術語集の一つである *Arthaviniscaya* XXVI (Samtani ed. pp. 53-62) もこの系統に属する(対応漢訳についてはVを参照)。

Ⅶ その他

三十二大人相の系統(Ⅰ)(岡田)

以上挙げた経論以外に *Mahāvastu*^(*) (Senart ed. I. pp. 226-227, II. pp. 29-30)、『賢劫經』西晉竺法護訳(大正十四、二五—二八上)、『大般涅槃經』北涼曇無讖訳(大正十二、五三四下—五三五中)あるいは『宝積經』関係の經典(例えば *Ratna-pāṭaliśrīcakra*)などの重要なテキストに三十二相に関する記述が見られるが、Ⅰ—Ⅵのように明確な系統を形成するには至っていない。これらの経論及び今回取り扱えなかった経論については、個別に検討することとしたい。

1 *Garudapurāṇa* I. 65 における身体に吉凶相を論じたもの
 2 H. Kohlenberger; "Glück- und Unglückszeichen am menschlichen Körper", *Acta Orientalia* Vol. XX 1948 pp. 36-76.

2 逸見梅栄『印度に於ける礼拝像の形式研究』(『東洋文庫論叢』第二十一号)東京美術、一九八二年、四七頁以下参照。

3 『三十二相經』と *Lakṣaṇasūtrānta* との対応に關しては宇井伯寿『印度哲学研究第四』岩波書店、一九六五年、七七頁以下参照。

4 高原信一「Mahāvastu 所伝「仏の三十二相」について」『仏教研究』第二号一九七二年九〇—九九頁参照。

〈キーワード〉 三十二大人相の系統

(神戸女子大学瀬戸短期大学講師)